武蔵野幕屋38周年記念祭

我を見よ！　何ぞ我を見るや！

――使徒行伝第３章――

（「活かすキリスト」154号１９７８年12月号より）

１９７８年９月24日

小池辰雄

エン・クリストー　御霊のバプテスマ　ただキリストの力だけ　キリストの名に在って　御名を呼べばその中に投げ入れられる　人の霊は太陽のようなもの　聖霊のみ　ドラマティックな逆説的な言い方　「我を見よ」「何ぞ我を見るや」

【使徒３】

1 昼の三時、いのりの時にペテロとヨハネと宮に上りしが、2 ここに生まれながらの跛者かかれて来る。宮に入る人より施済を乞うために日々宮の美麗という門に置かるるなり。3 ペテロとヨハネとの宮に入らんとするを見て施済を乞いたれば、4 ペテロ、ヨハネと共に目を注めて『我らを見よ』と言う。5 かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、6 ペテロ言う『金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め』。7 すなわち右の手を執りて起こしに、足の甲と踝骨とたちどころに強くなりて、8 躍り立ち、歩み出して、且あゆみ且おどり、神を讃美しつつ彼らと共に宮に入れり。9 民みなその歩み、また神を讃美するを見て、10 彼が前に乞食にて宮の美麗門に坐しいたるを知れば、この起こりし事に就きて驚駭と奇異とに充ちたり。

11 斯て彼がペテロとヨハネとに取りすがり居るほどに、民みな甚だしく驚きてソロモンの廊と称うる廊に馳せつどう。12 ペテロこれを見て民に答う『イスラエルの人々よ、何ぞ此の事を怪しむか、何ぞ我らが己の能力と敬虔とによりて此の人を歩ませしごとく、我らを見つむるか。13 アブラハム、イサク、ヤコブの神、われらの先祖の神は、その僕イエスに栄光をあらしめ給えり。汝等このイエスを付し、ピラトの之を釋さんと定めしを、其の前にて否みたり。14 汝らは、この聖者・義人を否みて、殺人者を釋さんことを求め、15 生命の君を殺したれど、神はこれを死人の中より甦えらせ給えり、我らは其の証人なり。16 斯てその御名を信ずるに因りてその御名は、汝らの見るところ識るところの此の人を健くしたり。イエスによる信仰は汝等のもろもろの前にて斯る全

癒を得させたり。17兄弟よ、われ知る、汝らが、かの事を為しし は知らぬに因りてなり。汝らの司たちも亦然り。18然れど神は凡ての預言者の口をもてキリストの苦難を受くべきことを預じめ告げ給いしを、斯くは成就し給いしなり。19然れば汝ら罪を消されん為に悔改めて心を転ぜよ。20これ主の御前より慰安の時きたり、汝らの為に預じめ定め給えるキリスト・イエスを遣し給わんとてなり。21古えより神が、その聖なる預言者の口によりて、語り給いし万物の革まる時まで、天は必ずイエスを受けおくべし。22モーセ云えらく、「主なる神は汝らの兄弟の中より我がごとき預言者を起こし給わん。その語る所のことは汝等ことごとく聴くべし。23凡てこの預言者に聴かぬ者は民の中より滅し尽くさるべし」24又サムエル以来かたりし預言者もこの時につきて宣伝えたり。25汝らは預言者たちの子孫なり、又なんじらの先祖たちに神の立て給いし契約の子孫なり、即ち神アブラハムに告げ給わく「なんじの裔によりて地の諸族はみな祝福せらるべし」。26神はその僕を甦えらせ、まず汝らに遣し給えり、これ汝ら各人を、その罪より呼びかえして祝福せん為なり』

●エン・クリストー

1昼の三時、いのりの時にペテロとヨハネと宮に上りしが、

「上りしが」とは、「上ることを常としていた」というギリシャ語の使い方です。

2ここに生まれながらの跛者かかれて来る。

これもかつがれて来るのを常としていた。

宮に入る人より施済を乞うために日々宮の美麗という門に置かるるなり。

他人の助けによってやっと置かれたんですね。

3ペテロとヨハネとの宮に入らんとするを見て施済を乞いたれば、

ペテロとヨハネはペンテコステを過ぎている彼らです。福音書のペテロとヨハネとは違う。キリストと一緒にいた時のペテロもヨハネも聖霊以前でした。驚くべきキリストと直々に居ても、どうにもならないのでした。ところが、今やキリストが十字架の贖罪を果したあとで天界に往かれて、聖霊が臨んで来たあとのペテロとヨハネです。

4ペテロ、ヨハネと共に目を注めて『我らを見よ』と言う。

大事な言葉です。この「我らを見よ」――或いは「我を見よ」でもいいんですが――こういう簡単な非常に深い言葉はしっかり掴んでもらいたい。

「我らの中へと見込め」（プレップソン・エイス・ヘーマス）

というような、

「じっとわたしたちの中を見ろ」

という意です。「我らを見よ」というのは外側を見るのではない。中へと見入ることです。

[5]かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、

これも「注意して見た」という意味です、何をくださるだろうかと。

[6]ペテロ言う『金銀は我になし。然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名に在って歩め』。

金銀といったのは、銀貨と金貨のことですが、要するに、

「金はない。けれども、わたしに有るものを汝に与う」

非常に簡単な言葉です。

「しかし、わたしが持ってるもの（ホ・デ・エコー）をお前にやるよ」

と。ところが見えないです、この持っているものは。何かと思ったら、

「ナザレのイエス・キリストの名」

がそれでした。大変な言葉です。「名に在って」というのは「名の中に於て」ということ、

「エン・トー・オノマティ・イエスー・クリストゥー」

「ナザレのイエス・キリストの名に於て、名に在って、名の中で」

歩めと。この「エン」という字が非常に大事な言葉です。この前も言いましたね、

「エン・クリストー」「キリストの中で」

と。「に於て」とか「に在って」と訳すべきです。「名によりて」（現行訳）というと、手段、方法みたいな形になります。ところが「名に於て」「名の中で」、これは絶対に観念の言葉ではない。意味じゃない。

「わが言（ことば）は霊なり、生命（いのち）なり」

とキリストは言われたが、その「霊なり、生命なり」をペテロは、はっきりと実証している。もうペテロには力が来ているから、こういうことが言えるわけです。このペテロの言は驚くべき信から発してる。その信はまた本当の現実である。み霊の現実の中にペテロはいる。ペテロは正にキリスト一切となっていました。

「我に有るもの」とは「キリストの名」であった。名がしかし、実名であった。称名（しょうみょう）とか称法とか言う、「南無阿弥陀仏」「南無妙法蓮華経」と。これがみんな一流の坊さん達に於ては、また本当の信徒に於ては、実（じつ）になっているわけです。聖名と我とが一如になっているとき、その聖名は実名となっている。結局、

「それが本ものであるか、観念であるか。根源の現実であるか、うわべのことであるか」

と、信仰の事態はこれによって勝負ありなんです。

「称（とな）うればわれも仏もなかりけり、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

と一遍上人が詠いましたが、これなども正に一如の境地です。

●御霊のバプテスマ

私は無教会で、１９２３年に信仰に入りました。今は１９７８年ですから、55年、半世紀以上経ちました。１９５０年に御霊のバプテスマを受けました。それまでは27年ですから、55年から27年を引くと28年、要するに初めの半分は観念信仰だったわけです。１９５０年から後が本ものに成って来た。この本ものは限りなく進んで往くので、「これでいい」ということはもちろんないです、いくら本ものでも。質的には限りなく進んで往く。死を乗り越えても進んで往く。私の無教会時代はそういった観念時代でした。

私が御霊のバプテスマを受けて、キリストの名がとにかく本ものになって来た。聖書が楽に読めるようになって来た。これはもう仕方がない。誰が何と言ってもこれは本当です。私の相対的実存がどうであろうと、そんなこととは関係がない。

根源のところに来たら信仰の質がちがって来ます。ペテロもヨハネも、聖霊が来てからはガラリ変ってしまった。キリストの名が実であるためにはどういう現実となればよいのですか。

「我に有るもの」「ホ・エコー」というのは聖霊のことなんです。この聖霊の力で、聖霊の現実で、キリストの名を呼べば、直ちにそのことが実現して来る。生まれつきの跛者が立った。

「ナザレのイエス・キリストの名に在りて歩め」

と。聖霊はダイヤモンドとも、何とも換えることができない。この世のどんな宝とも絶対に換えることができない。もうはっきりしています。私から聖霊を取ってしまったら、私はもぬけの殻になってしまいます。皆さんもそのことを体験しつつあられるわけです。

「私の信仰が」

なんて、そんなもんじゃない。普通、クリスチャンに聞くと、

「まだ信仰が浅いもんですから、聖書の研究が足りないもんですから、まだ人の愛し方が薄いもんですから……」

なんて、いろんなことを言う。そういうこっち側の話じゃないんです。

私は信仰も何もありませんよ、「自分の信仰」なんていうものはない。ところが、御霊が来てしまってから、

「こっち側がどうである、こうである」

というのは、全然問題ではなくなってしまった。ずいぶん躓きのようなことを私は言いますけども、本当なんです。

ペテロが、

「我らを見よ。わたしたちの中を見てごらん」

と言いました。ペテロを見ても何も見えない。うちなるキリストの名であり、聖霊であったからです。

「この世の宝は何も持っていない。けれども、私の中にある、この比較を絶するもの、

聖霊をお前にやる。それが何をするか見ていなさい」
というわけだ。

ナザレのイエス・キリストの名に在って歩め！』[7]**すなわち右の手を執りて起こしに、**

もうペテロが聖霊に満ちて手を執ったから、跛者には全身にビリッと来ているわけです。

足の甲と踝骨（くるぶし）とたちどころに強くなりて、[8]**躍り立ち、歩み出して、且あゆみ且おどり、**

もう大変です。びっくり仰天だ、この跛者は。

神を讃美しつつ彼らと共に宮に入れり。

生まれつきの跛者に、これはもう身体の大変革が起きたわけだ。身体の変革が起きる奥に、彼は無意識的に魂の革新が起きている。魂の革新が、忽然と起きました。ペテロの、

「イエス・キリストの名にあって歩め」

という、この権威ある言葉で身心もろともに即刻主のものとなりました。キリストの本願の愛の力で、生まれつきの跛者の魂も身も同時的に即主の状態となったわけです。罪をあがなわれ、身体は改造されたので、神を讃美した。み霊を受けたのです。これは跛者がなおされた以上に大切な事態です。

[9]**民みなその歩み、また神を讃美するを見て、**[10]**彼が前に乞食にて宮の美麗門（うつくしもん）に坐しいたるを知れば、この起こりし事に就きて驚駭（おどろき）と奇異（あやしみ）とに充ちたり。**

その通りでしょう。本当に驚いたのです、

「あやしい。変だ。どうしたんだ!?」

と。このペテロが、福音書では波みたいな男が、もうすっかりキリストの霊に満ち溢れて、証言を乗りこえて実証だ。行為をもって証したわけです。即言即行です。発した言が直ちに行でした。

●ただキリストの力だけ

私は無教会にいた時、こういうところを先生方が驚嘆して語るのを聞いたことがない、正直のところ。霊的な行為に対してむしろ警戒する傾きがありました。

「信仰のみ、信仰のみ」

と言って、信に凝り固まって、その信が観念的硬化現象を起こしているわけです。信仰を私している。自分の信仰といったものにしている。それでは硬化現象を起こしますよ。「信仰」を何ものかと思う。なぜそんなものを大事にするんですか。「信仰」など言わずに、

「キリストさま！と全身で叫ぶこと」

とでも言った方がよさそうです。

[11]**斯て彼がペテロとヨハネとに取りすがり居るほどに、**

もう嬉しくてたまらないからね。

民みな甚だしく驚きてソロモンの廊と称うる廊に馳せつどう。

さっき言った美麗の門の傍らの廊下です。

12**ペテロこれを見て民に答う『イスラエルの人々よ、何ぞ此の事を怪しむか、何ぞ我らが己の能力（ちから）と敬虔（けいけん）とによりて此の人を歩ませしごとく、我らを見つむるか。**

ペテロの信仰の現実はさきの、

「我らを見よ」

とあとの、

「何ぞ我らを見つむるか」

の一見矛盾したような二つの言にずばりと表現されています。

「われを見よ

「なぜ我を見るか」

とは、絶対矛盾の自己同一という消息です。ここに信仰の秘訣がある。

「わたしの敬虔でもなければ、わたしの信仰の能力でもない」

と言って、ペテロは自分の信仰など問題にしていません。

「ただキリストの力だけだ」

というのです。

「あの人は敬虔な人だ、信仰があつい人だな」

とかいって、大抵の人は熱心な信仰の人をそう言ってほめる。それではダメです。仏教の一流の坊さんたちはやはりペテロのような心境をもっていました。即ち自分を何者とも思っていない。白隠にしても、良寛にしても、親鸞は言うまでもない。

我々の信仰があついとか、敬虔であるとか、そういう事を何かとし、またそれを問題にし、顧みているうちはだめです。ところが、普通の信仰はみんなこれなんです。本ものは掴（つか）みどころのない消息です。つかみどころがないけれども、台風の眼のような物凄い中心がある。この中心は、聖霊という中心なんです。

八方破れです。八方破れで、打ち込もうとしても打ち込めない。構えがない。構えなき構えというやつ。宮本武蔵の二刀流も、あれは二刀が一つになっている。更に一つが無になって無刀流になる。武蔵に睨まれただけでお終い。

「参りました！」

と。結局、私が賜っている「無」という言葉は、非常に内容の深い言葉ですから、到底、一義的に言えるものじゃない。

13**アブラハム、イサク、ヤコブの神、われらの先祖の神は、その僕イエスに栄光をあらしめ給えり。**

イエスの臨在をここに、

汝等このイエスを付し、ピラトの之を釋さんと定めしを、其の前にて否みたり。

14 **汝らは、この聖者・義人**

神一切で生きていた、神の聖意に完全に自分を乗せていた。それが義人です。

を否みて、殺人者を釋さんことを求め、15 **生命の君を殺したれど、**

ところがどっこい、

神はこれを死人の中より甦えらせ給えり、

相対的現実では彼らが殺したけれども、イエスは彼らのために身を献げたんです。そういうどうにもならない人間の、我々の罪の全部を背負って、キリストは十字架にかかった。ところが、十字架にかかりっ放しで死んでしまうような人ではない。霊的生命、霊体をもって、現われてくる。

我らは其の証人なり。

実際見た。始めは疑っていた。けれども、本当にキリストに出っ食わして、彼らは参った。参ったから証人になったのであって、

「分るの、分からないの」

なんていうことじゃない。降参したんです、キリストの霊的生命に。

●キリストの名に在って

いつも申している通り、

「降参しなくては証人になれない。いわゆる信仰にも絶する。自分の信仰なんていうものは当てにしない」

ということです。全存在で投げ入れる、投身です。先ず投身してください。自分の全存在をキリストの中に投げ入れる。相手はキリストですから、無条件に受けとってくださる方ですから。

「でも、お前はこうである」

なんて、絶対におっしゃらない。全存在をキリストの中に投げ入れれば、誰でも、キリストは無条件に受け入れてくださる。手だけではだめ、足だけではだめ、頭だけではだめ、心だけではだめ。全存在です。自分の意志を肯定しているうちはだめです。

とにかく、使徒たちと同質の信仰になってください。そうでないものは、もう信仰なんて言わない方がいいくらいだ。聖書の現実、彼らの現実と同質に、ずれのない世界に入りたいわけです。使徒行伝第3章のペテロのこの態度に本当の信仰の秘訣がある。彼はもう全然自分が無い。キリストだけ。観念しているんじゃない。御霊が入っておられて、このキリストがなさった。

「なぜ私を見るのか」

相対的に人間ペテロを偉いと思ったり、その信仰がすばらしいと思ったり、とんでもない話だと、ペテロは呻くが如く言った。

「神の僕（しもべ）イエスの栄光のあらわれだ！」

と叫んだ。

僕というのは、自分の全存在を明け渡している者をいう。神に全托、投身のイエスに無限無量な内容が自由にあらわれた。こんどは、そのキリストの僕とペテロもなったので、ペテロを通してキリストの栄光があらわれたわけです。そういう境地はいわゆる自由なんていう言葉では表しきれない世界です。無限無量の何ものかです。この使徒行伝第３章を読んで深く祈入して本当に上から臨む爆発的なものを体受体現してください。

16 **斯てその御名を信ずるに因りてその御名は、汝らの見るところ識るところの此の人を健（つよ）くしたり。**

キリストの御名、実力ある御名を称名したら、即座に実力を以て応えてくださった。

「イエス・キリストの名によって」

なんて祈りのあとで一般に付け加えて祈っていますが、これは祈りの中で一番大事な要（かなめ）です。

「イエス・キリストの名に在って」

これが付けたしであってはとんでもない。これに力が入らなかったら、そんな祈りをキリストは聴き給わないですよ。キリストの名が執成して、この祈りを聴いてくださる。詩篇第23篇にも、

「御名の故に義（ただ）しき道に導き給え」

とあるように、こちら側の救いのためではない。神・キリストそのものの故に、神が原因であり、目的であり、道である。だから、神は始めであり、終りであり、中である。ダンテの『神曲』も、そういう神を謳（うた）っている。

イエスによる信仰は汝等のもろもろの前にて斯（か）る全癒を得させたり。

すっかり治してしまった。全癒というんだから心身共に治してしまった。相対的現実に於て

「治るか、治らないか」

なんてことを問題にすることはない。根源の現実では、治らない癌も治っている。医学の祖ヒポクラテスが言っている。

「自然の力で人間は治るようになっているんだ」

と。自分の内なる自然力、外なる自然の力、草根木皮がもっている力。これに超越界からくる霊的な力。この霊的な力をキリストは百％に持っておられた。

「神―自然―我」

というのは生命のつながりで、そのような現実を生きていたのはあの大詩人ゲーテでした。

●御名を呼べばその中に投げ入れられる

さて、

「主さま！」

と一言御名を呼べば、

「キリストよ！」

と御名を呼べば、直ちにその一言のもとに、キリストの中に自分が投げ入れられる。そういう祈りをしないうちはだめなんです。俄然そこに力が来る。それは申しあげている通り、十字架に於て私たちは既にキリストの中に投げ入れられている自分を見なくてはいかん。だからパウロが、

「我キリストと共に十字架せられたり（もう生きていません）、キリスト我が内に在りて生き給うなり」

と。キリストの御霊が生きて在る。だから、パウロさんはあれから凄い事になった。ユダヤ人が一向パウロを理解しないどころか、パウロを迫害するので、この間も言った通り、

「たとえキリストに呪われても彼らの救われんことを」

と、パウロはユダヤ人のために執成（とりな）しています。パウロの燃焼している姿というものはどんなことなんだろうね。

世の中のいろんな事を見ていると、およそこれ地獄だね。我々は地獄の現実に、天国を現じながら歩かねばならない。そのためには聖霊の他に力はないですから。

17**兄弟よ、われ知る、汝らが、かの事を為しは知らぬに因りてなり。**

キリストがどんなお方であるか、わかってないと。

汝らの司（つかさ）たちも亦然り。18**然れど神は凡ての預言者の口をもてキリストの苦難（くるしみ）を**

十字架の苦しみを、

受くべきことを預（あらか）じめ告げ給いしを、斯くは成就し給いしなり。

イザヤ書53章がこの絶頂のところですね。

19**然れば汝ら罪を消されん為に悔改めて心を転ぜよ。**

「悔改めて心を転ぜよ」ということは二重の言葉です。

「心を転じ、また転ぜよ」

ということ。180度回転しろと。「罪」とは、自分を見たり、人を見たりしているのを罪と言う。

「神・キリストを見る」

ということが「心を転ずる」ということです。

「この罪、かの罪」

なんてことではない。ペテロのこころの表現はまだちょっと突き抜けた表現ではありませんけれど、我々はその先を読めばいい。

「キリストに心を向けろ」

ということだ。そうすれば、自分を見たり、人を見ているその罪というやつは消えてしまう。光を受ければ、陰影（かげ）はどっかへ消えてしまう。

「光の中に入れ。そうすると、光となるよ」

と。

「汝らは世の光なり」

というのはそのことじゃないですか。

「わたしの光を受けろ、そうしたらお前の中に光が灯るから」

と。「回心」〔悔改〕なんて、何かもったいぶった気持をもってはだめですよ。頑（かたく）なら頑なのまま、慾心のまま、何でもいい。そのまんまキリストに向けたら、みんなキリストが消してしまうから。自分を見ているうちは、自分を大事にしているうちはだめです。

●人の霊は太陽のようなもの

西郷南洲の愛読した佐藤一斉の『言志（げんし）録』は素晴らしい本です。

「人心之靈、如太陽也」

という言もあります。

「人の心の一番の中心の霊は正に太陽のようなものである」

と。本来はそうなんだけれども、その光を失ってしまっているのが現実です。聖霊が来なければ、

「人心の靈、正に太陽の如く也」

という現実は来ない。また曰く、

「人心の靈、気を主とする」

「気」という言葉が非常に深い意味で使ってある。南洲は言いました、

「命もいらず名もいらず、官位も金もいらぬ人は仕末に困るものなり。この仕末に困る人ならでは艱難を共にし、国家の大業は成し得られぬなり」

と。要するに、

「何もいらん」

という。ただ、その「光」のことは言われていませんけれども。我々は何もいらんけれども、キリストの霊だけは絶対にいる。

「己を愛することは善からぬ事の第一なり」

と。自分に於て、いろんなものを惜しんでいるのは結局、

「自分を愛していること、それが最悪だ」

とは深い罪の洞察です。

「人を相手にせず、天を相手にせよ」

これは大乗的な心で非常に好い言葉ですね。

「天を相手にして、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし」

と。この後半は多少道徳的になっているけれども。むしろ、

「虚色ある勿れ」

とでも言いたいところです。

●聖霊のみ

20 **これ主の御前より慰安の時きたり、**

「慰安の時」というのは、「新天新地」、黙示録に示されている時です。

汝らの為に預じめ定め給えるキリスト・イエスを遣し給わんとてなり。 21 **古えより神が、その聖なる預言者の口によりて、語り給いし万物の革まる時まで、天は必ずイエスを受けおくべし。**

キリストはその歴史の終末まで、信ずる者を、万人を救わんとして、じっと待っておられる。この21節あたりは非常にすばらしい言葉ですね。預言者を起こすということをモーセに約束しているが、預言者は実はこのキリストだという。預言者以上の預言者です。

それからあとは、ユダヤ人だから、

「契約の子孫だ」

とか何とか書いてあるけれどね。

「なんじの裔によりて地の諸族はみな祝福せらるべし」。 26 **神はその僕を甦えらせ、まず汝らに遣し給えり、これ汝ら各人を、その罪より呼びかえして祝福せん為なり』**

これで第3章は終っています。ルターが「信仰のみ」と言いましたね。

「信仰のみ」（ソラ・フィデ）

また、

「恩恵のみ」（ソラ・グラティア）

と。私たちはここでむしろ、

「霊のみ」（ソラ・プニューマ）

「聖霊のみ」（ソラ・プニューマ・ハギオン）

「聖霊のみ」と言いたい。プロテスタントが

「信仰のみ」

ということに躓いてる。

「信仰によって義とされる」

という観念信仰に躓いているから。「義とされる」なんて、こちら側の問題じゃないんだ、本当は。

「聖霊のみ、神の栄光の現われんことのみ、聖名の崇(あが)められんことのみ」

と、そういう方面ですよ。全部向こう側です。魂がそうなって来たら、もう本当に楽になる。

「たとえ地獄に落ちてもいい。神様が神様であれば、聖名が讃えられれば」

と。極端にいうと、そういうようなのが本当の信です。親鸞の信がこれでした。絶信の信とはそのこと。そこにはキリストは地獄まで来てくださる。

●ドラマティックな逆説的な言い方

そういうペテロの、

「我を見よ」

というのと、

「なんぞ我を見るか」

というのと、この二つが本当の一つの現実であるということに気がつけばいい。

「我に有るもの」

これを持たなければ、それはこの聖書の使徒的信仰とは言えない。「我に有るもの」というのは、

「自分は何も持たない」

ということです、逆に言うと。

「我は何も持たない。こちら側では何も持たない。無者である」

と。今度は逆に言うと、無者は絶対有者なんです。相対的な無と有じゃないですよ。私の言っている無と有とは、絶対に一つのことです。無即有である。

「我に有るもの」

とは、

「我に無きもの」

であり、

「我を見よ」

とは、

「我を見るな」

であります。これらは絶対に一つの事なんです。

相対的自分は問題にならない。そういうように突き抜けてしまう。相対的な自分を問題にしている人は突き抜けられません。我々は要するに突き抜けることのできない奴だから、そういうものがもはや問題にならない。「突き抜ける」とか、「抜けない」とか、言葉は使いますけれども、そんなことをこちら側の問題としているうちはだめだということです。

困るね、私は、だからドラマティックな逆説的な言い方しかできないんです。けれども、突きぬけたキリストの十字架を受けとると、み霊が来て、突きぬけたキリストの復活を受

けとる。

●「我を見よ」「何ぞ我を見るや」

38年間、とにかくいろんな人が私に躓いたし、また人を躓かせた悪い奴だけれども、私の中に一貫しているものがある。私はキリストを見つめて来た。キリストの十字架につらぬかれて来た。私の中に居給うみ霊は何ものとも替えられません。

こちら側は生まれつきだめな人間だから、躓いたり、転んだり、いろいろです。私がもし立派な人間なら、過去の皆さんがついて来たでしょう。けれども、立派な人間でないものだから、いろいろな理由で去っていった。

しかし、敢て言わせてもらえば、私が立派な人間だったら、その人たちは結局、キリストをつかみそこなったでしょう。私がダメな人間であるものだから、このダメな奴の中に光っているものの故に、私に従って来た人たちは本当のキリストをつかんだのです。

そういう貴い兄弟姉妹が現にたくさん居ります。また去っていった人たちも、それぞれのところで本当にキリストをつかまえたら、それで好い。私は悔いも恨みもしていません。時折祈っています、その人たちの天的な幸を。

誰だって欠点のない人はないでしょう。罪のない人もありません。だからキリストは、

「審くな」

と言いました。他人を審くパリサイ根性をキリストは最もきらわれ、敵とされました。パウロは人殺しまでやってしまった。

「我は罪びとの首（かしら）なり」

と彼は告白しました。しかし、キリストが罪びとの首となって十字架にかかられた。このキリストに贖われて、パリサイだったパウロはキリストの第一の弟子となりました。問題はただキリストを、みたまのキリストを体で受けるか受けないかだけです。

今日、幕屋の38周年記念祭に一緒に読んだこのペテロの本当の信の現実、キリストを本当に証しているこの現実。これは聖書中の最も大切な箇所の一つですから、時折このドラマの中に入ってください。自らが跛者となり、自らがペテロとなって身読してください。

福音書のペテロは躓いたり、転んだり、あの通りでしょう。使徒行伝の聖霊のペテロはみ霊に光っています。この第3章のペテロをどうぞ決して忘れないでください。

「我を見よ」

「何ぞ我を見るや」

と。これが我々の魂の本当の叫びとなれば、それが本ものとなった証拠です。アーメン、ハレルヤ。